

文語日誌（平成二十五年二月一日）

山中伸彌教授のノーベル賞受賞は、倫敦五輪に於ける日本選手団の大活躍と相並び、平成二十四年を代表する明るき話題の雙璧なりき。

日本國民、或は日本といふ國家自體、稍自信を失ひつつあるかに見ゆるこの時期に、大いなるプライドと勇氣を授けられたること、終戦直後の湯川秀樹氏の受賞にも比すべき快舉かと覺ゆる。

ノーベル賞のかくも權威あるは何故ぞ。實は其の仕組みに要諦あり。單にノーベル財團よりの授與とせず、瑞典國王を絡ませたるところに大いなる英知あり。

瑞典國王は當然に純粹なる瑞典人かと思はるる方こそ多かるらめ。しかれど、瑞典國王の血筋は、淵源を辿らば佛蘭西系にて、元は拿破崙皇帝時代の將軍ベルナドット家に由來す。さらに、カール十六世グスタフ現國王の令正、シルビア王妃は父を獨逸人、母を伯刺西爾人に享けられ、元ミュンヘン五輪のコンパニオンにておはせり。

ちなみに、大婚に際し、當時の瑞典を代表せる世界的人氣グループ「アバ」、その前日名曲「ダンシング・クイーン」を王妃に捧げたるは大いに知らる。

ストックホルム市廳舎に於ける受賞者晚餐會にて山中教授の隣に臨席せられたるマデレーン王女は、そのシルビア王妃の次女におはす。

小生、一九八〇年代前半より中葉にかけてストックホルムに約三年間駐在したれど、當時迄は日本人のノーベル賞受賞者數、甚だ少なかりき。爾來幾星霜、平成十二年の白川英樹先生以降八件、十一人と受賞者數、飛躍的な増加を見せたり。かくの如き喜ばしき趨勢、今後も續くや否やは、日本人學生の創造性を伸ばす教育の後押し次第なりと覺ゆ。